

Maugham の「Catalina」論

A Study of “Catalina” by Maugham

田 中 正 志

(一)

Maugham (1874～1965) の従来の小説は根本的には idealistic であるが、表面上は cynical でまた、自然主義的な realism でもあると一般に見られているが、1948年、74才の時に「私の最後の小説」として発表された *Catalina* は今までの小説と異って idealism が前面に出て、real な描写は単なる補助的役割を果たしている。旅行好きな Maugham は世界各地を旅し、彼のお気に入りの国はフランスについて、スペインである。*The land of Blessed Virgin* (1905) *Don Fernando* (1935) という彼の旅行記はスペインの風土と歴史と人間を取り扱ったもので Maugham のスペインに対する思いの強さがわかる。そのスペインが *Catalina* の舞台となっているのがこの作品の注目に値する点であろう。

(二)

聖母昇天日、即ち、8月15日、Castel Rodriguez の市は昂奮の気配で一杯である。この日、当市出身で長年不在であった身分の高い二人の人物が到着することになっており、彼らに敬意を表して、いろんな催しが準備されていたからである。一人は Segoria の司教、Don Blasco Valero で、いま一人はその弟、国王軍の部将、Don Manuel である。

Carmelite 派の尼僧の修道院附属教会で、足萎えの少女が聖母マリヤの像の前で熱烈な祈りを捧げている。彼女は16才で美しい娘で、帰宅しても今日は家には誰もいないので、淋しく、教会の入口の階段に腰をおろし泣いている。そ

の時、うしろに一人の女の人が立っていた。これがこの小説の奇蹟のはじまりである。

Suddenly she heard a voice.

“Why do you weep, child?”

She looked up, startled, for she had heard no one approach. She saw a woman standing behind her and it looked as though she had just come out of the church, but she had just done that herself and there had been no one there. The woman wore a long blue cloak that came down to her feet, and now she pushed back the hood that had covered her head. It looked as though she had indeed come out of the church, since it was a sin for women to enter the house of God with uncovered heads. She was fairly tall for a Spanish woman and she was young, for there were no lines under her dark eyes, and her skin was smooth and soft. Her hair was very simply done with a parting in the middle and tied in a loose knot on the nape of her neck. She had small delicate features and a kindly look. The girl could not decide whether she was a peasant, wife perhaps of a farmer in the neighbourhood, or a lady. There was in her air a sort of homeliness and at the same time a dignity that was somehow intimidating. The long cloak concealed the garment underneath, but as she withdrew her hood the girl caught a brief glimpse of white and guessed that that must be the colour of her dress.

“Dry your tears, child, and tell me your name.”

“Catalina.”

“Why do you sit here alone and cry when all the world has gone forth to see the reception of the Bishop and his brother the captain?”

“I am a cripple, I cannot walk far, Señora. And what have I to do with all those people who are well and happy?”

The lady stood behind her and Catalina had had to turn round to speak to her. She gave a glance at the church door.

“Where have you come from, Señora? I did not see you in the church.”

The lady smiled, and it was a smile of such sweetness that the bitterness seemed to fade from the girl's heart.

“I saw you, child. You were praying.”

“I was praying as I have prayed night and day since my infirmity fell upon me to the Blessed Virgin to free me of it.”

“And do you think she has the power to do that?”

“If so she wills.” ¹⁾

Catalina はおだやかで、親しみ深い女の人に自らの悲しい物語を打ちあける。

復活祭の闘牛のために若い牡牛が運ばれていく途中、突然、一頭の牡牛が逃げ出し、横町に突進し、大混乱が起り、その中で逃げまよう Catalina はふとすべったとたん、ちょうど牡牛の進んでくる目の前で倒れた。あばれ牛が勢いにまかせて彼女の体を踏みつける。それ以来、右足が萎えて足の自由を失ったばかりでなく、恋人 Diego Martinez も失い、それで泣いていたのです……と。

“Then I will tell you how you may be cured. The son of Juan Suarez de Valero who has best served God has it in his power to heal you. He will lay his hands upon you in the name of the Father, the Son and the Holy Ghost, bid you throw away your crutch and walk. You will throw down your crutch and you will walk.”

This was not at all what Catalina expected. What the lady said was surprising, but she spoke with such calm assurance the the girl was impressed. At once doubtful and hopeful, she stared at the mysterious stranger. She wanted a moment to collect her wits before she asked the questions that were already forming themselves in her mind. And then Catalina's eyes nearly started out of her head and her mouth dropped open, for where the lady had been there was nothing. She couldn't have gone into the church, for Catalina had had her eyes fixed on her, she couldn't have moved, she had quite simply vanished into thin air. The girl gave a great cry, an more tears, but tears of a different kind, coursed down her cheeks.

“It was the Blessed Virgin,” she cried. “It was the Queen of Heaven, and I talked with her as I might have with my mother. Maria Santissima, and I took her for a Moor or a New Christian!” ²⁾

その女の人はどうしたら足が直るかを教えるとその姿がみえなくなり、Catalina はその方が聖母マリヤだと知る。

Catalina は16才で美しく、年のわりには背が高く、十分發育した容姿で魅力的で正式の名は Maria de los Dolores Catalina Orta y Perez という。父親の Pedro Orta は彼女が生れると間もなく、一身代つくるべくアメリカ大陸へ行き、その後、なんの便りもない。母親の Maria Perez は夫の生死も不明ながら、いつの日か黄金を携えて帰国し、一家すべてが金持になることを夢みつけ、信心深く毎朝ミサに出かけは夫の安全を祈った。Catalina は母と伯父の Domingo Perez と三人で暮している。

Domingo は貞淑な Catalina の母にとっては苦勞の種であったが彼女は弟を愛し、弟のためにも祈りを捧げる。彼は神学校に行き、下位の僧職につき、剃髪式を受けた。彼と同期生の一人がこの日、市中への到着を住民たちが祝っている Segovia の司教 Don Blasco Valero である。Domingo は神学校に入学したはじめから、乱暴で放蕩好き、加えて酒飲みで、飲みすぎると人のいやがることを言い、同僚の神学生たちの鼻つまみとなり、20才にならぬうちにムーア人の奴隷女に子をはらませ、この不埒な事件が発覚しそうになると逃亡し、旅廻りの役者一団に加わり、二年後、突然、父親の家に帰る。その父に Domingo は自らの罪を後悔し、身持ちを改めること誓い、自分は聖職には不適だから、大学に入って法律を学びたいので送金してほしいという息子を信じて、大学に入れる。大学に八年間在籍したがやはり不良学生で追放の身となる。

その後、イタリアへ行って軍隊生活に入り、ここでも散々放埒をつくし、ひまな時間を慰めるに十分なほど多くの思い出をもって故郷に帰る。当年40才で Catalina は9才であった。両親はすでに亡く、身寄りには夫に捨てられた姉 Maria と可愛い姪 Catalina の二人きりだった。Maria は針仕事で生計を立てて Catalina と質素な生活であったが家の中に頼りになる男がいることを望んでいたのを弟を同居人にする。

Domingo はいろんな雑用の仕事をして、経済的には独立し、経済的には迷惑をかけてなかった。彼は詩や戯曲に関する書物に多くの金を費し、舞台のた

めの著作に専念したがどれ一つとして上演されなかった。彼は Catalina を大変愛し、彼女の教育を引き受け、信仰の諸個条を教え、父親のように振舞った。

Catalina は母親に昼間に起ったことを一部始終語り、今日、この町に迎えられる Don Blasco Valero 司教こそが自分の不幸を救って下さる方であると言う。しかし、母親は奇跡を語ることによって教会当局が干渉の手をのばすことを恐れて他言しないように Catalina に言う。

De Valero 家は古くからのキリスト教徒で、由緒正しい家柄だが、彼の唯一の身代は市から一マイルほどへだたった Valero と呼ばれる農村の近くに貧弱な領地をもっていたが貧しい一族であった。十年間にわたって、毎年一人ずつ子供ができたが、ほとんどが夭折し、生き残ったのが男の子三人で Blasco, Mannuel そして Martin である。

長男の Blasco は幼少の頃から頭脳明晰で信仰に厚く、適令に達すると Alcala de Henares 神学校から大学へ進学、文学修士及び神学博士の称号を与えられ、教区僧職でも高い地位を期待されていた。ところが、突然、研究と祈禱と瞑想の生活をするためにドミニコ教団に入り修道僧となったが彼の天賦の才能はすぐ認められ、風采の立派さと雄弁のすばらしさのために各地に説教のために派遣され、また母校の出身大学にも派遣された。彼は信仰の純潔を保ちつづけ、異端者を完全に根絶することを力説し、宗教法廷の峻厳をも説き、親子、夫妻であろうと背教に対して告発を命じ多くが焼き殺されたり、無期禁錮、財産没収、罰金その他の刑を課す。

彼の力強い熱弁が大学当局に深い感銘を与え、その後、神学の教授に任命される。数年後、37才の若さで Valencia の宗教裁判の裁判官にも任命される。

Valencia は海港でイギリス、オランダ、フランスなどの外国船がしばしば入港し、それらの乗組員が新教徒である場合が多く、また、異端的著述などの輸入等のため、さらに、ムーア人は強制的にキリスト教に改宗させられたが大部分にとって保身のためであるので、彼らを絶滅するために Balesco は実力を発揮する。

Blasco の10年間の存在期間に37回の異端の火刑、70人以上を焚刑に処し一

般の人々に見せしめとした。そのことが国王の息子 Philip 王子に敬意を表することになり、その後 Philip 王子が王位につくと Blasco は司教職に任じた。

次男の Manuel は兄より数年年下で兄ほど利発で勤勉でもなかったが体力に秀で栄えと勇気と野心をかね備えていた。スペイン国王のために働き、20年間の軍隊生活で多くの功をなしとげ、ナポリ国内の San Costanzo 伯に叙せられ、40才の時、郷里に帰って来たのである。

三男の Martin は普通の男で名誉を重んじる Valero 家にとっては自慢できる存在ではなかったのである。彼は少しばかりのやせた土地を耕作し、その收穫物で生命をつないでいたのである。父親にとって、彼は失望の種であったのだが、さらに大きな打撃を与えたのは身分の低いパン屋の一人娘と Martin が結婚したことだった。幾年かが過ぎ、幾人かの子供に恵まれた。すると、また別の打撃が Martin の父親に落ちかかったのである。パン屋が死亡し、賤しい職業との腐れ縁とも手が切れると思っていたところ、Martin は両親に向って、自分は妻の実家のパン屋を継ぐと宣言する。

Martin は自分の家族を階上に住ませ、早朝にパンを焼き、それから馬に乗って農場で懸命に働いた。彼のパンはおいしいので、繁昌し、一、二年後には農場で働く男を雇う程になった。Martin は毎日、両親を見舞いに行き安楽に老後を送らせた。近所の人たちは当初 Valero 家の息子ともあろうものがパン屋ごときに身を落したことに驚いたが彼が気取らない性質で慈悲心に富み、信心深く、親切で正直者として町の人々に歓迎され、彼の店は一種の寄合い場所になるほどである。

Martin が両親の世話を引き受けたので長男、次男は20年間、両親には送金すらすることはなかった。従って、Martin に老年に及ぶまで両親は頼っていたにもかかわらず、賤しい商売で一生を送ろうとしていることを恥じ、古くからの家名に名誉と栄光とをもたらした二人の息子達、Balasco, Manuel に最も優しい思いを抱くのである。

帰還の祭典で両親と三兄弟が久しぶりに対面し、Martin がパン屋を経営していることを知った次男の Manuel はこの市の貴族階級から妻を選び、野心を

抱いて郷里に凱旋しただけに家名を汚したとして弟を罵る。それに対して長男の Blasco は次のように弁明する。

“Our brother Martin is a virtuous and a pious man. He is a respected citizen and charitable to the poor. He has taken good care of our parents in their old age. I cannot blame him for taking a step which was forced upon him by circumstances.”³⁾

(我々の弟の Martin は有徳の、信心深い男だ。人から尊敬される市民であり、貧者に対しては慈深くしている。年老いた御両親の面倒をよく見ている。彼がいろんな事情からやむをえずとった手段を、わしは非難することはできないよ)

Catalina は夕食後、聖母マリアの件を伯父の Domingo に語り、かつての神学校の同級生の司教に自分の足を治してもらってほしいと懇願するが、そういうことは宗教裁判にかけられる恐れがあるので他言しないように強く言う。

翌日、Catalina の母は教会の神父を通じて司教に娘の話を伝えてもらうが司教も他言するなということだけだった。

カルメン会の女子修道院の院長 Beatriz もこの話を伝聞していた。彼女はスペインの大貴族の一人娘で、かつて司教が神学校時代に彼に恋し、彼がドミニコ会の修道士になったことを聞いて、彼女も修道院に入ったのである。

Beatriz は Blasco 司教と連絡をとり、カルメン修道院の名誉になると思い、この修道院で Catalina の足を治してほしいと願う。

やがてこの話は町中の人が知ることになった。

Domingo は聖母マリアが Catalina に語ったことを正確に問い直す。

She repeated the story.

“And then the lady said: The son of Don Juan de Valero who has best served God has it in his power to cure you.”

Domingo interrupted her harshly.

“But that is not what you told your mother. You told her that Blasco de Valero had it in his power to cure you.”⁴⁾

(彼女は一部始終をくり返した。「するとそのとき貴婦人が言ったのよ、神に最も忠実に仕えている Don Juan de Valero の息子が、お前を癒すだけの力を授かっている、って」

Domingo は荒々しく彼女をさえぎった。「それでは、お前がお母さんに話したのとちがうぞ。お前は Blasco de Valero が癒す力を授けていると言ったじゃないか」)

カルメン修道院の教会でミサを行い、Catalina の額に司教の片手を当てて

“I, the unworthy instrument of the Most High, in the name of the Father, the Son and the Holy Ghost bid you throw aside your crutch and walk.”

He had begun tremulously, in so low a voice that the nuns could hardly hear, but he spoke the last words loud and clear in a tone of command. Catalina, her face pale with emotion, her eyes shining, raised herself to her feet, cast the crutch aside, took a step forward and with a cry of anguish crashed to the floor. The miracke had failed.⁵⁾

(「至上者の取るに足らざる器なる我、父と子と聖霊の御名において汝に告げん。汝が松葉杖を投げうちて歩むべし」彼は震えながら、尼僧たちには聞きとれぬほど低い声ではじめたが、終りの一語一語は大きくはっきりと、命令する口調になっていた。Catalina は感動に色蒼ざめ、一步進み出た。と、苦痛の叫びとともに彼女は床にくず折れた。奇蹟は失敗した。)

Blasco 司教は自分の力のなさに涙するが、彼に仕えた Antonio 神父は今までの宗教裁判所長としての業績を列举して慰めようと努力する。Blasco 司教は自分が神の怒りを受け、人前で恥をかく罰を受けたことと、これまでずっと

彼の心の中で苦しんできたことが再現したことにあった。

それはギリシャ人の Demetrios Christopoulos という Blasco 司教の友人だった。彼はカトリシズムを批判し法王の至上権を認めず告発された。Blasco は彼を救おうと思い改宗をせまるが聞きいれず、次のように主張する。

“God has many names and infinite attributes. Men have called Him Jehovah, Zeus and Brahman. What does it signify what name you give Him? But among His infinite attributes the chief, as Socrates, pagan though he was, well saw, is justice. He must know that man does not believe what he would but what he can, and I cannot do Him so great a wrong as to suppose He will condemn His creatures for what is no fault of theirs. Your Reverence must not think I am wanting in respect if I beg you now to leave me to my own reflections.”

“I cannot leave you thus. I must try to the end to save your immortal soul from the raging fires of hell. Say one word to give me hope that you may be saved. One word to show that you are not unrepentant so that I may at least mitigate your earthly punishment.”

The Greek smiled and it may be that there was in his smile a touch of irony.

“You will do your part and I mine,” he said. “It is yours to kill, mine to die without quailing.”⁶⁾

（「神は多くの名称と、無数の属性とを持っております。人々は神を、エホバと呼び、ゼウスと言ひ、またブラーマンとも呼んでいる。神にどういふ名をつけようと、それが何を意味するでございましょう。神の無限の属性の中で何よりも、まず主たるものは、異教徒とは言え、ソクラテスが賢くも見抜きましたごとく、正義でございます。人は信じるものを信じるにあらずして、おのれに信じられるものを信じる、このことを、必ずや神は知っておいでになるにちがいない。わしとしては、神がその造り給いしものを、彼らの過ちではないもののためにお咎めになると考えるほど、大それた悪を神に対して働くことはできません。いまは、なにとぞ、静かに瞑想にふけらせていただきたいと申し上げても、礼を失しておるとはお考え

になりませぬでしょうな」

「わたしとしては、ここでお身と別れるわけにはいかぬ。わしは、お身の永遠の魂を地獄の却火から救い出すため最後まで努めねばならぬ。お身が救われるかもしれぬという望みが持てるなら、ただ一言、告げてほしい。わしが、せめてもお身のこの世の罰を軽くできるよう、お身は悔い改めずにいるのではないという証拠を、ただ一言、告げてほしいのだ」ギリシャ人は微笑した。その微笑には、あるいは一抹の皮肉がふくまれていたかもしれぬ。「あなた様は、あなた様の分をつくされる。わしはわしの分をつくす」彼は言った。「殺すのはあなた様の側で、従容として死ぬのはわしなのです」

次男の Manuel は Blasco に対して最もよく神に仕えたのは自分だと言う。司教は秘密にやるように忠告する。

Blasco 司教は Domingo と神学校以来はじめて再会し、驚くべきことを発言する。神に最もよく仕えているのは三人の兄弟のうち、パン屋を営んでいる Martin だと言う。

司教は弟の Manuel が奇蹟を実行しようとしているが、もし失敗したら、Catalina を魔女として火あぶりにすることを恐れる。

翌朝、大学の教会で Blasco 司教の司式でミサが行われ、町中の噂どおり Manuel が Catalina の額に手をあてて、祈りを捧げ、杖を捨てて歩くように命ずるが床にばったと倒れ、またもや奇蹟は成就せず、見物していた人たちは騒ぎ出し、ついに「魔女、魔女」と叫びつつ、Catalina の方へ群がってくる。その時、Martin が呼び出され、司教の言葉のあとをつけて小さな声で Catalina に「杖を捨てて歩け」と命ずると今度は倒れず、号泣しながら母親に抱きついた。まさに奇蹟の成就であった。

当日の夜は大騒ぎとなり、Catalina は町の人々から祝福される。

Catalina の足が治った今、彼女を見捨てていた Diego が彼女の前に現れ、母親の反対にもかかわらず、ほのかな恋心が再び二人を接近させる。

カルメン会的女子修道院長 Beatriz は Teresa de Cepeda という修道女に徹底した嫌悪の念を抱き、彼女の死後、彼女が聖徒の列に加えられるであろうことを認めざるをえない。

Beatriz は自分の修道院からも聖徒に列せられる人材を探し、あの奇蹟によって健康な足になった Catalina がそがふさわしいと修道院入りをすすめる。結局、修道女となるが、ある婦人のおしゃべりで Catalina を聖徒にするらしいということを知り家に帰る。Catalina を修道院へもどすためには恋人の Diego から彼女を離すべきだと Beatriz は一計を案じ、Diego の誘拐を企てる。計画実行の夕方、Catalina は何となくしに心配のあまり Diego の助けを求める。Catalina の彼に対する愛情に Beatriz 修道院長はかつての自分の姿を見てとり、この二人を逃がそうと決意し、馬車で逃がしやり、二人は途中、教会で結婚式を済ます。

その後、二人は旅役者に加わりスペインを巡業してまわる。幸にも、Catalina はすばらしい女優に成長し、独立して一座をもたないかというすすめもあって、叔父の Domingo に相談するために来てもらうことにする。

二人で故郷を出て年月は3年が経過し、久しぶりに Catalina に再会した Domingo は彼女の女らしい魅力と演技力に感服し、一座をもつことに大いに賛意を表するのである。

ちょうどその頃、一座は寺院で復活祭に宗教劇を演ずる契約ができており、目下稽古中であった。マグダラのマリアの生涯をテーマにしたもので、そのマリアは Catalina が演じることになっている。

Domingo が Catalina の手紙でこの Segovia の町に來たいと思ったのはこの地にいる Blasco 司教が高い地位にのぼった後、どのように暮しているか知りたくてならなかったのだ。

復活祭のあと Domingo は Blasco 司教に面会を求めたところ、心よく歓迎し次のように彼の心を披瀝する。

“The desires of hope no longer afflict my soul. It is satisfied in

its union with God, so far as in this life it is possible, and it has now nothing of this world to hope for and nothing spiritual to desire. I have written a letter in which I have begged His Majesty to allow me to resign my ecclesiastical offices and dignities so that I may retire to a convent of my order and spend the remainder of my life in prayer and contemplation.”

Domingo could contain himself no longer.

“Blasco, Blasco, the girl who took the part of Mary Magdalen is my niece, Catalina Perez. When she ran away from Castel Rodriguez she joined the troupe of Alonso Fuentes.”

The Bishop stared at him with amazement. He was dumbfounded. Then with a sweetness Domingo had never seen on his face before he smiled.

“Truly the ways of God are inscrutable; how strange are those He has chosen to lead me to my goal! Through her He wounded me and through her He healed me. Blessed be the mother that bore her, and all glory to God, for when she spoke those heavenly words she was inspired by Him. I shall remember her in my grateful prayers to my dying day.” ⁷⁾

（「希望への慾念は、もはやわが魂を悩ましはせぬ。わしの魂は、この世において可能の限り神と結びついたことに満足している。いま、この俗世に望むところは何一つないし、教会に欲するところも何一つない。わしは陛下に手紙を書いて歎願した、わしの教団の修道院に引きこもり、生涯の残りを祈禱と瞑想とに過したいゆえ、聖職者としての任務と地位とを辞することを許していただきたい、とな」

Domingo はもはや己れを制することができなかった。

「Blasco, Blasco, マグダラのマリアの役を演じた女こそ、私の姪の Catalina です。あれは Castel Rodriguez から逃げだすと、Alonso Fuentes の一座に加わったのです」

司教はびっくりして彼をみつめた。唾のように黙りこくった。それから、Domingo がこれまで見たこともない優しさを顔にたたえて微笑した。

「まことに、神の道は測り知れぬものだ。わしは目的地に達せしめるため

に、神は何というふしぎな道を選ばれたことであろう！ あの女によって神はわしを傷つけたまい、あの女によってわしを癒したもうたのだ。彼女を生んだ母親よ、祝福されてあれ。栄光すべて神にあれ。何となれば、あれら天よりの言葉のごとき言葉を語るあいだ、あの女は神の靈感を受けていたからだ。わしは、わが死の日のくるまで、感謝の祈りのなかに彼女のことを忘れぬだろう」

Domingo は「芸術の魔法だ。芸術もまたその奇蹟をなすことができるのだ。」⁸⁾

Blasco 司教の心を感動させた台詞を書いたのは蔑まれたる劇作家、放縦な罰当りものの Domingo その人だった。

Blasco 司教は辞職が認められ、僻地にある修道院に引きこもり、「アリストテレスが人生の目的なりと断言し、神秘家たちが神の眼には貴きものと映ると信じた瞑想に晩年を捧げた。」

Blasco 司教は恩恵や特権を謝絶し、他の修道僧と同様に扱われることを主張し、きびしい生活を送り、数年が過ぎ彼の力はおとろえていき静かに往生をとげた。

Beatriz は Teresa が聖徒に列せられたことを知るや激怒し “a woman of very humble origins” ⁹⁾ (非常に賤しい生れの女) という最後の言葉を発し、往生する。

Catalina と Diego は Madrid で独立して一座を作り、Catalina の才能、美貌そして貞淑さが讃美され、大いに成功する。

Diego は俳優としては平凡な存在であったが経営面で能力を発揮したので二人は年と共に財をなし、六人の子宝にも恵まれ、大変幸福な結婚生活であった。

(三)

Catalina はこれまでの Maugham の作品の中でも少々趣を異にする作品と言えるだろう。研究者によっても色々のジャングルに入れている。

この作品の主役は Catalina であることは論を待たないところであるが、この小説の中に貫流しているのは神であろう。その神を中心として Domingo と Blasco 司教が主役を演じているので、三者が主役とも考えられる。また、この小説は聖母マリアの姿を通じて神が人間を導き、神の本質を追求する宗教小説だと筆者は考えたい。しかし、他面、恋物語の一面もあり、宗教裁判や当時のスペインを題材にし、Maugham 自身が言っているように作家が円熟の老境に達してからはじめて手をつけるものという信念のもとで、歴史小説を漂わせてもいる。即ち、多面性をもつこの小説は有機的な描写に欠ける点が多くみられるのは残念ではあるが、例えば奇蹟、Catalina に聖母マリアの告知、Catalina の足が元どおりに回復、と同時に教会の鐘がひとりで揺れ鳴る、Blasco 司教が祈り中に空中に浮上、Teresa の遺体が芳光を放つ、そしてその後、掘りおこされた時にも腐敗していない、等々。

物語の前半、即ち、宗教的なものを中心に展開していたものが、後半には Catalina の演劇活動へと移行し、少々違和感をいだく。

総体的には Maugham の人間観はこれまでの数多くの作品に貫かれていて、司教という高德な Blasco にも自分が Catalina の足を治せるという思いあがりがあり、人知れず苦悩する姿があり、放蕩的性格の Domingo にもすぐれた才能があり、女子修道院長で強圧的で自己中心的 Beatriz でも自分の娘時代の苦渋を思い、Catalina と Diego の恋を実らせる人情味、という悪を否定した Maugham の考え方がこの作品に貫かれている。

(四)

この作品の中で Blasco は難行苦行にたえ、祈禱中に Blasco の体を浮上させる力を与え、Catalina の足を治すのは自分だと思わしめた神が Blasco に失敗させ、絶望の極におとし、最終的には Catalina の演ずる宗教劇によって Blasco の苦悩から解放される。

Domingo はこの作品で Maugham は人の生き方に関して肯定された人物として、また、二つの作品に一味も二味も加味し、Blasco と対象的な生き方で

Maugham 自身の内なるものを代表的に表現しているといえよう。

特に高位にある Blasco 司教が下位にある僧, Domingo に神についても質問する, 唯一の友で, とりわけ, Catalina に対する奇蹟の失敗について, Blasco の疑問に Domingo の応答は大変滑稽とも思えるほど, 高位にある司教に納得できるようなことではなかったが, 一応, 強い反論もしない Blasco の寛大さに少々不自然さを感じる。

“Do you remember that on the occasion to which you just referred I told you how surprising it seemed to me that among the infinite attributes that men ascribe to God they have never thought of including common sense? But there is another that has even more completely escaped their attention, and yet, if a creature may venture to judge of these things, it is of even greater value. Omniscience would be incomplete without it and compassion repellent. A sense of humour.”

The Bishop gave a slight start, seemed about to speak, but stopped himself.

“Do I shock you, brother?” Domingo asked seriously, but with a faint twinkle in his eyes. “Laughter is not the least precious of the gifts that God has granted us. It lightens our burdens in this hard world and enables us to bear many of our troubles with fortitude. Why should we deny a sense of humour to God? Is it irreverent to suppose that He laughs lightly within Himself when He speaks in riddles so that men, deceived in their interpretation, may learn a salutary lesson?”

“You put things strangely, Domingo, and yet I do not know that there is anything in what you say that a good Christian need reject.”

“You are changed, brother. Is it possible that in your old age you have learned tolerance?” ¹⁰⁾

放埒無頼な Domingo にこれだけの見解を言わしめるのは一体, 何であろうか。恐らく, Maugham は我執を捨てた人間のみに与えられる力を Domingo に与えたといえよう。

それに対して, 我執を捨てきれず, 救われぬ人として女子修道院長 Beatriz

を登場させ、特に死の直前になっても、宗教者 Beatriz に対して、容赦なく裁いているような気がする。

Maugham 好みの理想像は奇蹟を成就した Martin, Catalina そして、聖女に列せられた Teresa で、全く Maugham の価値観、理念を如実に表わしているということが明白である。

Maugham の神に対するとらえ方は興味深いものがあるが、「モームの世界」の相良次郎教授は次のように指摘している。

Domingo は作者の代弁者である。彼の言葉、および物語の筋から推すと、Catalina の神は、常識とユーモアのセンスを持つ、正義や純潔や慈悲や愛の神であり、就中自然の生命を嘉する神である。異教的な色彩はもつが、その神はキリストの神であることには相違なく、万物に内在する汎神ではなく世界を創造した超越神であり、また人格神であり倫理神であり、その摂理は世界に及び、人間の魂からする祈りを聞いてくれる神である。即ち本質的にはキリストの神であるが、それにモーム自身の解釈を加えたものである。

モームの見る宇宙の本質は、長い作家生活を通じて、いろいろと変化した。*Liza of Lambeth* その他リアリズムの作品では、それは運命であり、「人間の絆」でも、同じく無目的虚無的な宇宙意志であり、「月と六ペンス」では、一転して汎神に近い、美しく神秘で奇怪な宇宙の霊であり、「彩られたとばり」ではキリストの神がかすかに影をみせ、「剃刀の刃」では、一即多であり、世界に遍満する霊であると共に、あらゆる物質としてあらわれるアートマンである。そして最後に「カタリーナ」における窮極の実在は自然の生命を慈悲を以て眺めるキリストの神である¹¹⁾。

Maugham はこの作品の中で神を絶対的なものとして扱っているとは思えない。その一つの証拠として神に対して常識を求めている、即ち、人間として考えているととれるのである。Maugham 自身は人間探求の作家であり、神は Maugham の作品の中では自由に変容させ、人間探求の具として生かされているといえよう。

(五)

さて、Maugham はこの作品の中で何を訴えたかったのであろうか。その重要なポイントとして Domingo か Blasco 司教に伝言した聖書の言葉があげられる。

マタイ伝 第21章42節

イエスは彼らに言われた、「あなたがたは、聖書でまだ読んだことがないのか、

『家造りらの捨てた石が隅のかしら石になった。これは主がなされたことで、わたしたちの目には不思議に見える』。

聖書で言う「家造りら」は祭司長、パリサイ人を指すのであるが、この作品では Beatriz のような修道院長、Blasco 司教のような高位に僧職であり、Martin こそが「家造りらの捨てた石」であり、Catalina を救う奇蹟を成就された「隅のかしら石」である。もう一人、Domingo が Catalina の演ずる脚本を書き、それによって高位にある Blasco 司教を解脱させる。

まさに Domingo も「捨てられた石」である。Maugham は慈悲なる神により、彼らに光を与え、こよなく愛した人物としてこの作品の中で親しみをこめて、我々に74歳にして到達した人間観を表明していると筆者は考える。

< Note >

- (1) Catalina pp.2-3.
- (2) op. cit, pp.6-7.
- (3) op. cit, p.34.
- (4) op. cit, p.74.
- (5) op. cit, p.79.
- (6) op. cit, pp.98-99.
- (7) op. cit, pp.238-239.
- (8) op. cit, p.240.
- (9) op. cit, p.254.
- (10) op. cit, pp.235-236.
- (11) 「モームの世界」 pp.294-295.

< Bibliography >

- Maugham, W. S.; Catalina Heineman 1948.
 Raphael Frederic; W. Somerset Maugham and his world Thames and
 Hudson London 1976.
 Brophy John; Somerset Maugham, Supplement to British Book News.
 Maugham, W. S.; The Summing Up Heinemann 1938.
 Calder, R. L.; W. S. Maugham and The Quest for Freedom, New York,
 Doubleda 1972.
 Maugham, Robin; Somerset and All the Maughams, Greenwood Press
 Publishers.
 Janas Klaus W.; The World of Somerset Maugham, Greenwood Press Pub-
 lishers.
 Curtis Anthony; Somerset Maugham, Mecomillan Publishing Co, Inc. New
 York.
 Maugham Ted; Maugham A Biography, Simon and Schuster Nou York.
- | | | |
|-----------------|---------|---------|
| 「サマセット・モームの全小説」 | 越川 正三著 | 南雲堂 |
| 「モームの世界」 | 相良 次郎著 | 評論社 |
| 「モームの研究」 | 中野 好夫編 | 英宝社 |
| 「モーム」 | 上田 勤著 | 研究社 |
| 「モームの二つの世界」 | 山川 鴻三著 | 京都あぼろん社 |
| 「サマセット・モーム小説群」 | 越川 正三著 | 関西大学出版部 |
| 講座・イギリス文学作品論 | 高見 幸郎著訳 | 英潮社 |
| 「サマセット・モーム」 | | |
| 20世紀英米文学案内19 | 朱牟田夏雄編 | 研究社 |
| 「サマセット・モーム」 | | |